

---

# おばかなアタシと年上カレシ 2

神田春希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おばかなアタシと年上カレシ2

### 【Nコード】

N5103P

### 【作者名】

神田春希

### 【あらすじ】

アタシにはちよつと意地悪な年上のカレシ　アツム　がいる。  
大好きなアツムに手料理を食べさせてあげたいと思ってるんだけど、アタシはものすごく『超』がつくくらいの料理下手……。  
料理部に入って腕を上げようとがんばってるんだけど、なんだか最近アツムとすれ違ってばかり。アツムはアタシの事、どう思ってるの？

## 1・料理部にいこう！

その日アタシはかなり強引にチアキを誘った。

「ちよつと咲。あんた本気なの？」

「本気も本気！　ちょー本気だよー！！」

アタシはチアキに向かってガッツポーズをする。

「あんたの本気は、まあ分かったけどさ、  
なんで私まで料理部に入らないといけないの？」

チアキは面倒くさそうに手をひらひらとさせながら言った。  
「だって」

途中から部活に入るのって、結構勇気いるじゃん？

一人じゃこころぼそいのよぉ。お願い！」

アタシはチアキの手をぎゅっと両手で握って、軽く上目遣いで見る。

この技は、実は男子だけじゃなくて女子にも結構効く。  
アタシの必殺ポーズなのだ。

……ただ一人、アタシのカレシには効かないんだけどね。

「あー、分かった分かった。

分かったから、手をはなしなさい」

「え？　入ってくれるの??」

「そう。入ってあげる。

帰宅部よりも、なにか部活に入っていたほうが内申点もいいだろうしね」

「やれやれ、といった感じで肩をすくめながらチアキは言った。  
「ありがと！　チアキ！」

これでアタシ、いい奥さんになれるよ！」

アタシは喜びのあまりチアキに抱きついた。

そんなアタシをチアキは冷静に対処する。

「こちらら。」

料理部に入ったからって、すぐに上達するわけないでしょ？

目玉焼きもろくに作れない人なんだから」

そう、アタシは全然料理が出来ない。

目玉焼きの作り方はなんとなくわかってるつもりなんだけど、  
まず第一に卵がうまく割れない。

これは致命的だ。

なぜかどう頑張っても、卵の黄身がぐしゃっとつぶれてしまう。  
それと同時に卵の殻が中に入る。

卵の殻を取るのに悪戦苦闘。

そのあと、油を敷いて卵を入れて、ふたをして焼く。

アタシは半熟が好きなので、頃合を見計らってふたを開けると……  
見るも無残なこげこげのぐしゃぐしゃ目玉焼きの出来上がり。

なにがだめなのか、さっぱり分からない。

でもアタシは大好きなアツムに、アタシの手料理を食べさせたい  
のだ。

『咲、料理上手なんだね。』

こんなにおいしいんだったら毎日でも食べたいよ』

なーんて言われたい！

勝手な妄想をして、おもわず顔がにやける。

「咲、またあんた変な妄想してんでしょ」

チアキが呆れ顔で言うてくるけど、そんなのお構いなしだ。

「だって、やっぱり男の人がぐつと来るのって、

料理上手な女の子だって聞いたし！

料理が上手になったら、きっとアツムも、アタシのこと  
惚れ直すと思うし！」

嗚呼！ 早く料理上手になりたい！！

いい奥さんだねなんて言われたい！！！！

放課後、アタシは少し呆れ顔のチアキと一緒に料理部の部室に行くことにした。

## 2・入部希望します！

「お邪魔します」

アタシはそういうと、料理部の部室に入る。

料理部は、その名の通り料理をする部活だ。

部室は「調理室」で放課後この部屋の前を通ると、なにやらしいにおいがしてくる。

でも、この日は何故かいいにおいはしていなかった。

あれ？

しんと静まり返った調理室には誰もいない。

「今日部活休みなの？ 誰もいないんだけど」

アタシが思ったことをチアキが的確に言う。

「そう……なのかな？」

アタシはがっかりした。

だって料理上手になるための第一歩がすでになくなってしまったのだから。

「ええー！ そんなの困るよ！

アタシの料理上手の道は？？」

素敵な奥さんになる野望はどうすればいいの？！」

とりあえずアタシはチアキに文句を言った。

「そんなこと、私にいわれてもねえ。

とりあえず、今日は出直そうよ」

チアキはヤル気なく呟く。

するとそのとき後ろから声を掛けられた。

「ん？ もしかして入部希望者か？」

聞き覚えのある声にアタシとチアキは後ろを振り向いた。

そこにはアタシたちの担任の先生、佐藤先生が笑顔を振りまいていた。

「佐藤先生？」

「お、なんだお前たちか。」

どうした？ もしかして入部希望とか？

うちの部は今年しかないから、お前たちみたいな若者が入ってくれと

かなり助かるなあ」

佐藤センサーは右手であごを触りながら、私たちを見る。

「部活って…… センサーはこの部なんでしたっけ？」

アタシが質問すると、佐藤センサーはちよつとオーバーアクション気味に

肩を落としながら言った。

「ホームルームの時とか、結構言ってたんだけどな。」

上の空だったのか？

全く仕方がないやつだなあ。

先生は料理部の顧問だって何度も言っただろ？」

「そ、そうだったんですか。」

すみません聞いてませんでした」

アタシはちよつと悪かったな、と思つてぺこりと頭を下げた。

「そんなことより先生。」

私たち、料理部に入部希望なんです。

特に咲。

この子の料理下手を、料理上手にして欲しいんですよ」

少し意地悪に、チアキは言った。

「なに？！」

本当に入部希望だったんだな！！」

先生は満面の笑みを浮かべて、アタシたちを見る。

その先生少年のような笑顔に、アタシは少しどきりとした。べ、別に浮気とか、そんなんじゃないんだけどね。アタシはアツム一筋だし！

だいたい、女子高では、男の子いないので、ちよつと歳が若くて、背丈が高ければ普通の顔であってもキヤーキヤー言われる存在になる。

佐藤先生も例外ではなく、他の生徒からきーきー言われている。

まあ、センサーって普通に見てもルックスは結構上。アタシから言わせるとかつこいってよりは『かわいい』の部類に入と思う。

背は高いけど童顔で、笑うと結構あどけない少年のような顔になるので、

生徒は「そこがすてき！」とか「守ってあげたくなる」とか（本人は知らないだろうが）色々言われている。

それが今、ちよつと分かった気がする。近くで先生の笑顔を見ると、その、なんていうか、「守ってあげたくなる」と言う気持ちも分からなくもないって言うか……。

いやいや！

アタシはアツムのかわい〜彼女さんなのだ！

べつの男になんかドキツとなんてしちゃいけないんだってバ！



### 3・アタシのレベルは・・・

「じゃあ、これで二人は正式に料理部の一員だ！  
おめでとう！」

なにがめでたいのかは分からないけど、入部届けを書いたアタシ  
たちに、

センサーは人懐っこい笑顔を振りまく。

だ・か・ら！ その笑顔は毒なんだってば〜！

「そういえば、今日は部活休みなんですか？」

チアキがまじめな顔で先生に質問をする。

そういえばそうだ。

なんで今日は部活やってないんだろ？

「うちの部は三年しかないんだよ。

だから、三年生が修学旅行に行ってしまうえば先生しか残らないだろ？

先生だけ居ても部活にならないから、休みにしてただけ、

お前たちが入ったから、明日からでもがんばるか！

放課後、エプロンと三角巾を持って部室にきなさい。

先生がレクチャーしてやるからな」

先生は何かうきうきしながら、話をした。

そういえば修学旅行は今日から一週間の予定だったな。

場所は確か 京都。定番といえば定番だね。

「明日からって……なにを作るんですか？」

私はほとんど料理できるけど、咲は目玉焼きも作れないですよ？

「

げ。

そこは言わなくてもいいとこなんじゃない??  
アタシは恥ずかしさのあまり、少し俯いた。

「そうなのか？」

センサーはあごを右手で触り、何かを考えている。

「よし！ 分かった！」

そう言っていると、アタシに青いエプロンと三角巾を手渡した。

「え?? なんですか??」

「井上がどんな目玉焼きを作るのか、ちょっと興味あるな。

レベルも知りたいし、今から作ってみる」

センサーは爽やかに笑っている。

ってか、この感じ……なんか似たようなこと最近あったと思うんですけど??

嫌、とは言えないこの状況。

アタシは仕方なく手渡されたエプロンと三角巾を身に付ける。  
それにしても、なんかこのエプロンちょっと大きいな。

「先生、このエプロンってもしかして……?」

「ああ、俺のエプロンだけど？」

チアキの質問にセンサーはこともなげに答える。

ちよつとまで。

なんかアタシ恥ずかしいんですけど?

「咲、そのエプロン先生のだって」

チアキはアタシにわざと言った。

聞こえてたから、知ってるってっ！

わざわざもう一度言うことないのに！

アタシは少し顔が赤くなった気がした。

いやいや。

それは気のせいだ。

もし気のせいじゃなかったら、それはその、

今から苦手な料理を二人に披露しなければならぬからに違いない。

うん。きっとそうだ。

アタシは自分にそう言い聞かせた。

けして、センサーを意識してるんじゃないんだから。ね？

そして、アタシは目玉焼きを作った。

いや、作ろうとした。

結果は、実に散々なもので、チアキは涙を流しながら  
おなかを抱えて笑い転げている。

センサーはというと、アタシの肩をぽんと叩いて一言。

「よし！ 明日から特訓だ！」だそうで……。

アタシは明日のことを思うと、思い足取りで家に帰ったのだった。

#### 4・明日の準備

「はああああ〜っ」

アタシは何度目かのため息をついた。

何度考えても恥ずかしい！

ありえない！

最悪！

おなかを抱えて笑っているチアキは、まあ、置いておいて。  
センサーのあの、かわいそうになあつて感じの目！

その後の、「明日は特訓」とかって言うセリフ！

まるで、スポコンみたいじゃないですかー！！

大体、特訓って何やるの？

また玉子焼き（もどき）でも作らされるの？

う〜ん。憂鬱だ……。

そんな気分のまま、アタシは制服をベッドに脱ぎ捨て、  
長めのTシャツにレギンスというラフな格好に着替え、下に下りて  
いく。

「ねえ、おかーさん。

アタシのエプロンってどこだっけ？」

台所で忙しそうに夕食の準備をするおかーさんに声を掛けた。

「え？ 咲のエプロン？」

「……あつたっけ？」

おかーさんは振り向きもせず、おなべの火を弱火にする。

この匂い……。今日は煮物だな。

「エプロン、なかったっけ？」

「あんた料理全くしないからねえ。」

あ、確か美季<sup>みき</sup>がエプロン持ってたわよ。  
それを借りたら？

それにしても、どういう風の吹き回し？

咲が料理でもするの？ あ、もしかして「

ガツコウで使うの。」

じゃあアタシ美季に聞いてくるよ」

アタシはおかーさんの話をあわてて遮った。

なんかいらぬことまで、根掘り葉掘り聞かれそう！

危ない、危ない。

アタシは階段を上がって、自分の部屋の隣にある美季の部屋の戸をノックした。

あ、ちなみに美季ってのはアタシの妹。

ちよつと生意気な13歳の中学生なのだ。

「美季居る？」

「なに？ 居るけど。勉強してるから邪魔しないでくれない？」

ほらきた。ドア越しに聞こえるのは不機嫌そうな返事。

生意気娘め！ かわいくな〜い！

アタシは美季の話を無視して勝手に部屋の中に入る。

「ちよつと！ まだ良いって言っていないでしょ？」

勝手に中に入ってこないでよね」

美季はシャープペン片手に文句を言う。

ほんと生意気だ！

ちよつと前までは『お姉ちゃん。おねーちゃん』ってアタシにく  
つついてきてたのに！

「……エプロン明日使っただけど、美季の使わないエプロン貸して  
よ。」

おかーさんが美季に借りろって言ってたし」

「えー。お母さんがそう言ったの？」

……仕方ないなあ。

ちよつと貸すだけだからね？ 汚くしないでよ？」

美季はぶつくさ文句を言いながら、アタシにエプロンを貸してく  
れたけど、

エプロンはそもそも服を汚れから防ぐのが目的なので、汚くしない  
でと言われてもちよつと困る。

ん？

「ねえ美季。」

これ以外のエプロンってないのかな？」

「ない。」

あと、私は勉強中なの。

出て行ってよね」

そう言つとアタシにくるりと背を向けて、勉強を再開した。

仕方なくそのエプロンを借りて、部屋に戻ってきたものの……。

「なんつーか。少女趣味？」

アタシは美季から借りたエプロンをまじまじと眺める。

全体はピンクのチェック。

そしてフリフリに白いレースのオンパレード。

ありえない

こんな恥ずかしいエプロンをして、佐藤センサーと特訓？！

か、かなりありえないんですけどっ！！

## 放課後、メロメロ談義

「咲、エプロン持ってきた？」

待ちに待ってない放課後がやってきた。

あんなに乗り気でなかったチアキがノリノリなのは意外だけど、アタシは特訓ということと、エプロンのことでかなり気が重い。

「持ってきたけどさあ〜。

妹のやつ借りたら、すっごい少女趣味で、恥ずかしいよ」

あの後、あまりにも恥ずかしいので、おかーさんに「アタシのエプロン買って！」と頼んでみたものの、

「美季に借りたんだからいいでしょ？」と相手にされず……。

ならばエプロンを買ってくるしかないと思ったら、近所のスーパーは「店内大幅改装のためお休み」だそうで……。

アタシは仕方なくあの、フリフリ少女趣味の恥ずかしいエプロンを持ってくる羽目になったのだ。

……今日の帰りにちゃんとした「恥ずかしくないエプロン」を買いうんだからね。

「どんなエプロンなの？」

チアキはアタシのエプロンをひったくるようにしてみる。

「かわいいエプロンじゃない」

へ？



チアキならげらげら笑い出すだろうと思っていたのに、意外な反応にびっくりした。

「咲の妹中学生だもんね！。

調理実習とかのときこれ着たら、男子なんてもうメロメロじゃん？最近見てないけど、美季ちゃんかわいいし」

あ、美季のことね。

確かに美季はかわいい。

いや、正確にはかわいかった、だ。

今は顔はまだ一応かわいいけど、性格ブスで最悪ですよ？ チアキ殿。

「でも、そのエプロン。アタシが着るんですけど？」

「あ そっか。

……咲が着ても、かわいいと思うよ？

男子もメロメロに ここ女子高だからそれはないか」

にやっと思ひ笑いするチアキ。

するとアタシの耳元でそっとうひいた。

「佐藤先生がメロメロになるかもよ？

どうする？ アツムさん、焼いちゃうんじゃない??」

「なっ、なに言ってるのよ！

そ、そんなことより、今日の帰り買い物付き合ってよ。ふつーのエプロン買いに行くから！」

もう！ チアキの馬鹿！

そんなこと言うから、アツムの声、聴きなくなっちゃったじゃん。

最近はお仕事忙しいみたいで、全然会ってない。

この前メールが来たけど、またどこか遠いところに行ってるから電波届かないし……。

アタシがちょっと暗い顔をしたからか、チアキはちょっとバツが悪そうに

「そろそろ先生がくるから準備しとこ？」と言ってエプロンを付け始めた。

アタシもそれに習って、妹のエプロンをつける。

今日はアツムから、メール、届くかな？

## 6・卵と巨匠とセンサー？！

しばらくして、佐藤センサーが調理室に入ってきた。

「お、ちゃんと身支度できてるな、関心関心。  
すぐ部活始めるから、手をちゃんと洗っておけ」

そういうとセンサーも身支度を始めた。

昨日のエプロンとは違う、モスグリーンのやつだ。

三角巾は白で、昨日との違いがイマイチわかんないけど。

アタシとチアキは石鹸で丁寧に手を洗い始める。

食べ物を扱うときはきちんと手を洗いましょう。というのはよく聞くけど、

実際のトコロ、面倒くさいな。なんて思ってた。

だって火を通したらなんでもおんなじジャン？

でも、センサーは『食べる人のことを考えてきちんと手を洗うんだぞ』と昨日言ってたっけ。

アタシの料理を食べる人

アタシの場合、やっぱアツムだね。

アタシは手を洗いながら、ちょっとニヤニヤとしてしまう。

早く料理上手になれるようにがんばるぞう！！

「よし、準備できたな。今日はお菓子を作るぞ。

みんなの大好きクッキーだ」

センサーはそう言うと、クッキーの作り方を黒板に書き始める。

たぶん、アタシに分かりやすくするためだと思うんだけど、卵の割り方まで書いてあるのがちよつと恥ずかしい……。

「咲。卵はあんたに任せるよ」  
隣にいた千秋がアタシに言った。

「え？　なんで？」  
チアキのほうがうまいじゃん。  
アタシはやりたくないなあ」

昨日、散々な結果だった『卵割り』はできればやりたくない。

「なに言ってるの。  
練習あるのみでしょ？」

料理上手な人なら『片手』で割っちゃうんだからね！」  
「か、片手で？」

両手でやってもうまく割れないアタシには、それはもう神の領域ってやつだ。

そんなのは『巨匠』と言われる人の技であって、アタシたち、一般ピーポーには関係ないってやつなんじゃ??

「多分先生も割れるんじゃないかな？」  
チアキはそう言つと、「先生って卵片手で割れるんですか？」と質問した。

センセは黒板にレシピを書きながら「ああ、出来るけど？」と言っ

き、巨匠がこんな近くにいるとは……、佐藤センセー恐るべし！

## 7・なぜかドキドキ！

「これ、おいしい」

調理も終わり、アタシたちは今優雅にティータイムをしている。

クッキーはさくさくとしていて、とてもおいしい。

……アタシはセンサーに文字通り、付きっ切りで特訓されてしまった。

卵を割るのをかなり失敗したけど、最後には「ぱかっ」とうまく割れたりして

ちよつと、いや、かなり嬉しかったりする。

失敗したのはその卵割と、小麦粉をふるいに掛けるところ。

目の前が粉だらけになったときは、本当にびっくりした。

そのほか結構、自分でもびっくりするくらい順調で、取り立てて失敗は無かった。

センサーって国語のセンサーやってるより、料理のセンサーになったほうがいいんじゃないのかな？

最近ではイケメンの料理教室つても流行ってるみたいだし。センサーきつと、女のヒトにモテモテするに違いない。

……どっかの主婦が、だろうけどね（笑）

「先生って上手なんですねぇ。」

料理教室とか開けばいいのに」

チアキはセイロンティーを飲みながら、言った。

やっぱりチアキもアタシと同じこと思ってたんだなあ。

アタシはナッツが入ってる一口サイズのクッキーをかじる。

香ばしい味がして、これなら何個でも食べれちゃいそう！

「んー。でも俺、国語の先生になるの子供のころからの夢だったしな。

料理は……まあ趣味だし。

定年になってから『熟年男子のための料理教室』なんてのもいいかと思ってるんだけどな」

センセーはちよつとテレながら答えた。

……こんな所も、きつと主婦にはたまらないんだろうな。

アタシは『なんちゃって主婦目線』でセンセー見てみる。

「定年って……！ 一体幾つになったときのことを言ってるんですか」。

今がいいんですよ。今が！

イケメン料理研究家が流行ってるイマが！

大体、こんなに料理が出来ない咲に、ちゃんとしたクッキーを作らせるなんて天才的ですよって！

私なんて、もつと凄いものを想像してときどきしてたんですから！

ー

おいおい。チアキちゃん。

なにげーに、酷いこと言ってますか??

「こんなにおいしいなら、売るべきです。

いや！ 売らなければならぬ！！

クッキー詰め合わせとして、かわいい袋に詰めて……

材料費がこれくらい掛かるわけだから、人件費も考えて」

チアキはアタシが反撃するまもなく、お金の世界へと羽ばたいて行ってしまった。

こついうとこ、ほんとガメツイなあ。

「センサーのお陰で、初めてちゃんとしたものを作れました。ほんとーにありがとうございます」

アタシは羽ばたいて行ったチアキをそのままにセンサーにお礼を言った。

これなら、アタシの『素敵なお嫁さんになるぞ計画』の進行も早そうだ。

「まあ、クッキーは簡単だからね。材料の分量を間違わないようにと、焼き加減を気をつければ誰だつて上手に出来るよ。」

それより、井上も卵の割り方、上手になったじゃないか。先生は嬉しいぞ。

最近成績も上がってるしな」

センサーはニコニコしながら、アタシのことを褒めてくれた。

褒めてもらうのって、なんだかくすぐつたい。

アタシはあんまり褒められたこと、ないからかもしれないけど。

そのせいかどうか分からないけど、ちょっと胸がきゅっとなって、アタシはちよつとときどきした。



## エプロンとアタシの気持ち

その日の帰りに、アタシはチアキとショッピングセンターに行った。

もちろんマイエプロンを買いに。

で、アタシは以外にふつーのエプロンって売ってないってことに、今更だけど気が付いた。

「ねえ。なんでこんな柄ばかりなのかな？」

アタシはエプロンを物色しながらチアキに聞く。

「エプロンなんておばさんが使うものだからじゃない？」

ほら、これなんてステキ！

なんか強そうだし、咲これにしなよ」

適当に見ていたチアキは、にやりと笑うと度派手なピンクの豹が描かれているエプロンをアタシの目の前に出した。

「……こ、これはちょっと……」

大阪のおばさんもビクリの、なんともいえない奇抜なデザイン！

大体、豹がでっかく描かれているだけでびっくりなのに、

それがショッキングピンクの色なのだ。

誰が着こなせるんだろう？ こんな凄いの。

「ねえ、チアキー。」

エプロンってあと何処で売ってるんだっけ？」

今までエプロンなんてものに興味も無ければ関心も無かったので、アタシはショッピングセンターの衣料コーナー以外に売り場を知らなかった。

「え？」

雑貨屋とかにあるんじゃない？」

「雑貨屋？」

「うん。」

以外に種類豊富だし、ここにあるのより普通のデザインだよ」

チアキはそう言いながら、今度は蛍光緑のパンダのデザインのエプロンを手に取った。

「そ、そんなところがあるんだったら、先に教えてよー！

危なく妥協してアニマル的なおばさんエプロンを買うところだったよー」

雑貨屋に行くと、確かにふっーのエプロンが置いてあった。

種類も結構あったので、アタシはとりあえず2枚買うことにした。ひとつはネイビーブルーのエプロンで、もうひとつはベージュのエプロン。

もちろん、ピンクでもないし、フリフリも付いてないシンプルなヤツ。

……センサーはあの少女趣味なエプロンを見ても何も言わなかったけど、何も言われないとそれはそれで恥ずかしい。

だって多分、アタシがフリフリエプロンが大好きだと思われてるんだろうし。

家に帰るなり、アタシはケータイのメールをチェックする。

メールボックスにアクセスしている間のちょっとした時間でさえ、

アタシにはじれったくて仕方ない。

新着メールは有りません

無機質なケータイの画面を見て、アタシは短くため息をついた。

そしてそのまま、ベッドに仰向けに倒れこむ。

「やっぱり無し か」

アタシはケータイをきゅっと胸に抱いた。

明日になれば、アツムの声が聞けると分かっているんだけど

……

そうなんだけど、やっぱり寂しい。

「声が聞きたいよう……」

まるで壊れ物に触るかのように、アタシの胸から離れた携帯のディスプレイ部分をそっと押した。

この前アツムから来たメールを表示して、読み返す。

『今週は現場の下見です。

不便なところなので、電波は届かないと思われます。

木曜日には帰れると思います』

いつもながらの、短くて端的な文。

「もっと普通のコトバが欲しいのにな」

アタシはここには居ない、アツムに向かって小さく呟いた。

付き合う前よりも、付き合ってからの方が寂しいのは、アタシがアツムのことを  
前より好きになってるからなのかな……。

でも、それでも……やっぱりさみしい……。

毎日って訳じゃないけど。

ちよつとだけでもいいから、アツムの声を聞きたい……。

触れることが無理なら、声だけでも聞きたいと思うのは欲張りなのかな？

会えないと分かってるけど、  
お仕事は大事だって分かってるけど、  
アツムの近くに居たい。

## アヤミとアタシ

昨日のクッキーは家族に（特に甘い物好きなおかーさんに）好評だった。

恥ずかしいエプロンのことは、ともかく置いて、アタシはちよつと部活が楽しくなりつつある。

だって、料理はほんとに駄目だったアタシなのに、ちゃんとしたおいしい食べ物ができるんだもん。

やっぱり最初が肝心なのかもしれないって、アタシは思った。

「おはようチアキ！

昨日のクッキーおいしかったねえ。

今日は何作るのが聞いている？

うまく出来るといいな」

アタシは教室に入るなり、チアキの姿を見つけて声を掛けた。

でも。

チアキはちよつと困ったような顔をアタシに向けているだけ……。

な、何？

どうしたの？

そう聞こうと思った瞬間になぞは解けた。

チアキの向かいには、あの、くらさわ倉沢綾実あやみが居たからだ。

綾実は一タシを見るなり、怖い顔で近寄ってきた。

能面みたいな、なんともいえない彼女の表情！

ま、マジで怖いんですけど！

「あなた、先生に興味ないって言ってた割りに、  
なんで料理部に入ってるのよ！！」

あまりの剣幕にアタシはへなへなと座り込んでしまった。

たぶんこれが俗に言う『腰が抜けた』ということなのかもしれない。

……って、そんなことはどうでもいいや。

とにかく綾実の気迫にアタシはたじたじた。

アタシは「ちがうって！」「って何度か言いかけたけど、

綾実は聞く耳を持つてくれなくて、アタシの悲痛な叫びは彼女には届かなかった。

結局そのときは、学校のチャイムでなんとかその場を離れることが出来た。

休み時間にチアキがアタシの弁明？　みたいなのをしてくれたお陰で、

綾実の怒りをなんとか静めることに成功。

でも、アタシはすっかり綾実に

「そんなに先生のこと好きなら、料理部に入ればいいじゃん？」  
って言うてしまった。

## 言葉とアタシ

「出来れば、よかったんだけどね……」

綾実は少し伏せ目がちになる。

チアキは小声で綾実がスポーツ推薦で入学したんだと教えてくれた。

あ……。

アタシ　なんてコト言っちゃったんだろう……。

いつも思ったことをすぐに言ってしまう。

考えて喋ればいいのにつて、そう思うんだけど、アタシはいつも、そう。

「う、ごめん……」

言ってしまった言葉は、もう消すことは出来ない。

ありきたりなコトバだけど、アタシは素直に綾実に謝った。

そんなコトバしか出てこないアタシは、やっぱり馬鹿だ。

なんだか恥ずかしくなって、足元に視線を落とす。

「別にいいよ」



綾実の優しい声に、アタシは思わず顔を上げる。  
するとそこには、綾実の柔らかな微笑があった。

考えなしに言ってしまった言葉は、綾実の心に突き刺さったと思う。

でも、

綾実はアタシに微笑んでくれた。

綾実は、強いな……。

「ほんと、ごめん」

そういうと同時に、アタシは綾実に抱きついた。

ほんとというと、綾実はアタシの苦手なタイプだ。

運動会系特有の、ハキハキして、実直で、融通が利かないタイプ

でも、今はそんなところがかわいくなって思う。

「ちよちよちよっ！！　な、なにになに????！」

きゅっ と抱きしめてから数秒後。

綾実は急にじたばたし始めた。

「何って？」

アタシは綾実から少し離れて、彼女の顔を見る。

アタシより頭ひとつ分背丈の大きい綾実を見つめると、彼女はな

ぜか顔を真つ赤にした。

「な、なんで抱きつく必要性があるのかなあ???」

綾実アタシの肩を手で掴み、ぐつと後ろに押した。

「それは咲の習性だから。

まあ、一種の愛情表現ってやつ？」

ニヤニヤしながらチアキがなぜかアタシの解説を始める。

「ってか、習性って何よ。」

「せ、先生にはその『習性』しないでよね！

わ、分かってる？」

そ、それと、その……上目遣いも禁止だからね！」

「センサーにはしないよぉ」

でも、上目遣いになるのは……アタシの背丈が高くならないと無理」

アタシは綾実にきつぱりとそう言った。

そして、アタシたちはお互いの顔を見つめる

「ぶっ」

「あははっ」

「はははっ」

アタシたち三人は、授業開始のチャイムが鳴るまで笑い続けた。  
意外と、アタシたち、いい友達になれるかも知れない。

それってホント？！

もう日課と言っていていくらいの『図書館デート』

そろそろちゃんとしたデートをしたいんですけど？　と思うけど、アツムにはなんとく言えないでいる。

意外とアタシって意気地なしなんだよね。

もし、嫌がられたら、とか思っちゃうと、前に進めなくなっちゃう。

それほどアツムのこと好きってことなんだろうな。

図書館に行ったら、でっかい張り紙があちこちに貼ってあった。

来週は館内のメンテナンスのため臨時休館日とします

「ねえねえ。アツム。

来週どうする？　図書館が臨時の休館日なんだってっ」

どこかに連れてって〜！　という意味を込めてアタシはアツムに言った。

もし連れて行ってくれるんだったら何処なんだろ？

遊園地？　動物園？　水族館？　映画館？　ショッピング？

大人の男の人が連れて行ってくれるところって全然想像付かなく

て、アタシはありきたりな場所を思い浮かべる。

でも。

そんなアタシのコトを知ってか知らずか。

アツムはちよつと面倒くさそうに頭を掻いて「お前もつすぐ試験あるだろー」と言った。

確かに。確かに有る。

再来週は試験ウィークだ。

でも、最近はアツムが勉強を見てくれるからちよつとは良い感じになったと思うんだけど。

「ちよつとくらい遊びたいよぉ。」

どうせ図書館が休みなら、勉強だってできないし」

アタシはちよつと膨れてアツムを見た。

「来週は勉強」

静かな声がアタシに語りかける。

まじめな顔をしているアツムもカッコイイな。

アタシはどきどきしながら反論した。

「だって、場所がないじゃん。

勉強ってどこでするの??」

「俺の家」

「え??」

家って？ それはアツムの住んでるところ？

「あ、アタシ行ってもいいの??」

アタシの心臓はもうどきどきを通り越してバクバクっていつてる。

デートが家だなんて!!

それってやっぱりぎゅーとか、ちゅーとか。

その後のことまで??! アリ??!とか??!!

「別にいいけど。」

……勉強道具忘れるなよ」

「う、うん!」

早く、早く来週の日曜日にならないかな？  
すっごく楽しみ!

## 月明かりの夜

嬉しすぎて夜中に何度も目が覚める。

時計を見るとまだ朝の三時……。

まだ早いと思って、ベッドの中で何度も寝返りをうつけど、どうしても眠れない……。

アタシは起き上がるとカーテンをそつとめくって、まだ暗い空を見る。

「……早く明るくなればいいのに……」

小さく呟いて、ふつとため息をついた。

明日は日曜日、アツムに会う日はいつも早起きをするアタシだけど、今日はいつもよりかなり早い時間だ。

それは、その、アツムの家に初めて行くからで。

もしかしたら、あの、ちゅーとかぎゅーなんかもあったりなんかして……。

そんなこと思ってたら、全然眠れなくなってしまったのだ。

仕方なくアタシは今日のお出かけに持っていく荷物をチェックする。

参考書と筆記用具、それとドリル。

勉強道具を忘れたら、ぜったいアツムになにか言われちゃうから、これだけは絶対忘れないようにしないと！

それと、アタシが昨日家で頑張って焼いたアップルパイ。

部活で作ったのがとってもおいしくて、アツムに食べさせたかったんだけど、

その時丁度アツムは出張に行っていてプレゼントできなかったんだよね。

だから明日こそと思って頑張って作ったんだけど、どうしてもパイ生地がうまく出来なくて。

生地だけは冷凍のやつを使っちゃった。

りんごはセンサーが言うように「紅玉」って種類を使ったから、かなり本格的な味になった（と思う）

アタシはアップルパイの入った箱をそつと指で撫でた。

「おいしいって、言ってくれるかな？」

月明かりが優しくアタシを照らす。

静かな、静かな夜。

アタシはアツムのことを思い浮かべながら、もう一度ベッドの中に入る。



早く朝になりますように

到着？

「変なところ、ないかな？」

アタシは部屋にある鏡で、自分の服装をチェックする。

いまいちアツムの好みの服がわかんないから、服を着るのもなかなかむずかしい。

ちよっと子供っぽいかな？ とか、地味すぎたかな？ とか。私服で会うときはいつも悩んでしまう。

今日は裾がフリルになってるチュニックと、レギンスにしてみた。

チュニックはちよっと長めの丈だから、レギンスを合わせなくても良かったんだけど、なんか、その、ちよっとアタシから誘ってるとか思われても……だし。

でも、アツムが、その……したいって言うてきたら、やっぱりしちゃうのかな……。

最初はすごく痛いって聞いたことあるから、なんかちよっと怖い。痛いのですごく苦手なんだよね……。

でも、断るのって……どうなんだろ。そんなに好きじゃないって思われたりしちゃうのかな……。

アタシは答えを見つけ出せないまま家を出た。まあ、きつと、なんとかなるでしょ。

なんて、思いながら。

アツムの家は学校と反対方向だった。

アタシの家の最寄り駅の次の次。

彼の話によると、駅を降りてすぐのマンションらしい。

アツムが書いてくれたメモを見て、目的地を目指す。

紙には簡単な地図と住所が走り書きで書かれていた。

アタシはどきどきしながらアツムの言っていた駅に着いた。

アツムの地図通りに行くと……確かにあった。ありました。

アツムの住んでいるマンション。

ってか。

これ、一体何階まであるの？　ってくらいのすっごいマンション  
なんですけど？

いや、マンションじゃなくて「オクション」って言うんだっけ？？

アタシはちょっと眩暈を覚えた。

そういえばアツムってお金持ちだったんだっけ……。

アタシはなんだか別の意味でどきどきしながら「オクション」の  
扉を開けた。



勉強……しますか。

エントランスは大理石？　なのかな。

やたらとゴージャスで、無意味に広い。

まるでホテルのロビーみたいで、奥のほうには豪華な椅子やテーブルが何個もある。

「これ……だよね？」

アタシはアツムに聞いた部屋番号のボタンを押す。

これが玄関のチャイムを鳴らすらしいけど……。

おかしいな。

アツム、もしかして寝てたりする??

何度か押してみたけど、何の返事もない。

アタシはケータイを取り出すと、アツムに電話しようとした。

「あれ？　着信？」

ケータイを見ると、着信を知らせるピンクの光が点滅してる。

#### 留守録1件

誰からの録音？　と思ってケータイを耳に当てると、そこからアツムの声が聞こえた。

『もしもし？　咲？　急な仕事でこれから出かけなくちゃいけない

なつた。

すぐ戻る予定だから、ちょっと待てるか？  
とりあえずまた電話する』

「え〜〜〜っ」

な、なにそれ？！

アタシはボーゼンとしてケータイを見る。

……仕事……。

仕方ないってのは分かるけど、分かってるんだけど。

やっぱり、寂しい。

別な日ならともかく。

なんで、今日なのよお……。

アタシは仕方なくエントランスにある椅子に腰を下ろした。

よし。

こうなったら何時間でも、アツムを待ってやろっじゃないの！

そうだ。

ついでに勉強とかしてたら、アツムが褒めてくれるかも知れない。

そう思って勉強道具を取り出す。

このテーブルは以外に広いから、勉強もしやすそうだ。

ちらりと腕時計を見ると、時間は10時丁度を指していた。

早く、帰ってくると良いな

アタシは参考書を開きながらそう思っていた。

## アップルパイと犬

勉強　　と思ったものの、どうしても内容が頭に入ってこない。

アツムが早く帰ってこないかな、と思って時計を見たり、連絡来てるかも？　なんてケータイを見たりしているアタシは完璧に上の空だった。

参考書を目で追っても、全く内容が頭に届かないなんて、アタシってどれだけアツムのこと好きなんだろう？

もう一度腕時計を見ると11時10分をさしている。

あれから1時間近く経ったんだけど、まだアツムからの連絡はない。

アタシは参考書をぱたりと閉じて、イスから立ち上がった。ちよつと喉が渴いたので、外にある自販機で飲み物でも買おうと思ったからだ。

とられるほどの荷物はないので、アタシは財布とケータイを持ってちよつとだけ席を離れた。

「どれにしようかな？」

アタシはきれいに整列されている飲み物の見本をじっくりと見る。ロイヤルミルクティーと炭酸のレモン……ロイヤルミルクティーでいいか。

アタシはちよつとステキなお嬢様気分で、優雅にそのボタンを押す。



ガシャンと音を立てて出てきた紅茶には、優雅にティータイムを決め込むお姫様の絵が描かれていた。

アタシはまたアツムを待とうと、オクシヨンの中に入る。するとアタシが勉強のために陣取った席の辺りに、誰か居ることに気が付いた。

小太りの、ちょっと派出目なオバサンだ。

シーズーかマルチーズみたいな白い小さな犬を抱きかかえてる。

なんか、ちょっといやなんですけど……。

アタシはそんなことを思いながら、歩いていく。

広いエントランスではちょっと歩くだけでも足音がこれでもかというほどに響いて、

当然その音に気が付いたオバサンはアタシの方を振り向いた。

「貴女、ここで何をやってますの？」

オバサンは急にアタシに向かって口を開いた。

その声はとげとげしくて、アタシはますます嫌な気分になった。

「知り合いが帰ってくるのを、待っているところです」

アタシは出来るだけ完結に言った。

この手の『ザマス』的なオバサンはどれも苦手なのだ。出来ることならかわりたくないし。

「知り合い？ 本当に知り合いなんですの？」

もしそうであっても、ここで待つてるといのは、いかなものか  
と思いますけれども？」

オバサンはアタシをじろじろと上から下まで眺めてこう続けた。

「それに……こう言うてはなんですけど、貴女みたいな子の来ると  
ころじゃありませんわ。」

この場所を勉強する場所にされても……あれですしねえ」

オバサンはそう言う腕の中の白い犬に向かって「ねえ、メリル  
ちゃん？」とか言うてる。

やなヤツ！！

「では待つている間に勉強するのはやめます。」

どうせ暇つぶし程度でしたから。

それなら宜しいんでしょう？」

アタシはわざと笑顔を振りまきながらオバサンに言った。

こういう人には逆らわないほうがいいのだ。

えーっと。こういうのを『触らぬ神に祟りなし』とかっていうん  
だっけかな？

アタシがそう言うて参考書をかばんに入れ始めると、オバサンは  
急に声を荒げた。

「貴女、私の言うてること全然分かってらっしやらないのね！  
もっと単刀直入に言うべきだったかしら？」

ここは貴女のような庶民が来る様な場所じゃないのよ！  
早く荷物をまとめて出て行きなさい！」

オバサンのものすごい剣幕に、その白い犬（メリルちゃんだっけ？）は驚き、

腕の中から飛び出ると、すごい勢いでテーブルの上に置いてあるアタシの荷物めがけて突進してきた。

あっ！ アップルパイ！！

そう思ったときにはすでに遅く、アタシが昨日苦勞して作ったアップルパイの箱がぐしゃりと床に落ちた後だった。

「うそ」

運の悪いことに、箱の口が開いてしまい、アップルパイが半分以上床に付いてしまっている。

「まあ、メリルちゃん！  
怪我はなくて？」

オバサンはアタシのアップルパイのことより、その犬のほうが大  
事らしくて、  
その犬がしたことなんかまるで無視している。

「……なんてこと、するんですか……」

アタシはオバサンを睨んだ。

オバサンはちらりと床を見ると、はき捨てるようにこう言った。  
「そんな不安定なところに置くからでしょ？」

こっちはメリルちゃんがその変なもののせいで怪我をするところだったのよ？」

なにそれ……

アタシが、悪いの???!

カッとなつて、おもわず右手に力を込めたそのときだった。

「今のは長谷川<sup>はせがわ</sup>さんが悪いですよ、彼女に謝ってください」

不意に後ろから男の人の声が聞こえて、アタシは思わず振りむく。

「さ、佐藤センサー?!」

アタシは驚いた。

だってそこにはアタシの担任で、料理部顧問の佐藤<sup>さとう</sup>翼<sup>はつ</sup>先生が立っていたから。

## ココアとセンサーとアタシ

アタシはぽかんと口を開けたまま佐藤センサーを見つめた。

「長谷川さん？」

センサーはオバサンに再度声を掛ける。

「わ、悪かったわね。」

佐藤さんの知り合いのお嬢さんだったのは、最初に言って欲しかったわ……」

オバサンはそう言うのと、そそくさとその場から逃げるように行ってしまった。

後に残ったのは、無残なアップルパイと、間抜けなくらい口を開けているアタシ、それとセンサーだ。

「井上、とりあえずアップルパイを片付けようか」  
そう言うセンサーはしゃがんで、ぐしゃぐしゃのアップルパイを片付けてくれた。

アップルパイ。

アツムに食べさせようと一生懸命作ったアップルパイ。

アタシは、なんだかすごく寂しくて、たまらなくなってしまう涙が零れた。

涙って不思議なもので、泣こうと思ってないときに限って後から後から溢れてくる。

「？ 井上？」

アップルパイを片付け終わった先生はアタシの方を振り返ると、泣いているアタシを見た。

やだ、恥ずかしい。

早く涙、止まってよ。そう思ったときだった。

センサーはぽんつとアタシ頭に手を載せて「上手に作れてたぞ？」  
「と言いながらぐりぐりと頭を撫でた。

「せ……せんせえ　！」

アタシは堪え切れなくなつて、センサーに抱きつくつと、思い切り声を出して泣きじゃくつた。

\*\*\*\*\*

「大丈夫か？ 井上」

センサーはホットココアの入ったマグカップをアタシの前に出してくれた。

「ありがとつ……いざいます……」

アタシは白い湯気の立つココアをふうふうと冷ましながらくりと一口飲んだ。

甘くて、とろりとする温かいココアに、アタシは安堵する。

……ココアの入ったマグカップが空になるころ、アタシはなんだか落ち着かない気分になっていた。

ここ、センサーの部屋……なんだよね。

エントランスで一向に泣き止まないアタシを落ち着かせるために、センサーは自分の部屋に連れてきてくれたんだけど……  
いくらセンサーとはいえ、男の人の部屋に入っちゃうなんて、ちょっとまずいんじゃないのかな？？

ちらりとセンサーを見ると、彼は心配そうにアタシを見ていた。

どきり。

アタシの胸の鼓動は途端に早くなる。

センサーは学校でよく見るスーツ姿じゃない。

黒のパンツにパーカーというラフな格好だ。

もともと童顔なので、いつもよりも若く見える。

「それにしても まさか井上だと思わなかったから、びっくりしたぞ？」

センサーはそう言うとアタシの頭をぐりぐりと撫でた。

「誰か人を待つてたんだろ？ まさか俺か？！ なんてな」

そう言うてにかつと笑うセンサー。

多分落ち込んでいるアタシを笑わせようとか思ってるんだろうけど、

そんなこと言われても笑えないって。

なんだか逆にどきどきしちゃいますから！

「あ、あの。すみませんでした。

あのオバサンに急に色々言われちゃって、なんだかテンパっちゃって……。

センサーにも迷惑かけちゃって……」

アタシはどきどきを悟られないように、ちょっと目線を下に落としながらお礼を言った。

「もう、大丈夫なので帰ります……」と言おうとした、まさにそのときだ。

ぐ、ぐう~~~~とアタシのおながが鳴った……。

こ、このタイミングで??！

あ、あ、あ！ ありえないんですけどあ?！

大きな音だった。

絶対センサーに聞かれた……。



アタシは耳まで真っ赤にしながら、ちらりと上目遣いで先生を見た。

## オムライスとケチャップ

「まあ、遠慮せずに食べ」

アタシの目の前にふわふわのオムライスが置かれる。

ケチャップの掛かったそれは、ふわりと白い湯気を立てて、出来たてだよ！ と自ら言っているようだ。

「うわ〜！ いい匂い……」

アタシは思わず目を瞑ってオムライスの優しい匂いをかいだ。

さっきおなかになった後、先生は「そういや、もう昼だったな」と言っていてちらりと時計をみた。

そしておもむろに立ち上がると「とりあえず、腹が減っては戦は出来ぬって言うし、飯にするか。井上」と言いながら台所へと消えていった。

で、現在に至ってるわけで……。

アタシは今センサーと向かい合って、センサーの手料理を食べる事になっているのだ。

「いただきます」

アタシはちらりと綾実のことを思ったけど、この状況で食べないのは失礼に当たるわけで……、

綾実に悪いなと思いながら一口、スプーンですくってぱくりと食べた。

「おいしいっ！！」

ちよつと半熟の卵が口の中に広がる。

中のケチャップライスが卵との絶妙なコンビネーションをかもし出し、

アタシはおもわず顔をほころばせる。

「お？ そんなにうまいか？

沢山有るから、いっぱい食えよ」

センサーは目を細めてにこやかにアタシのことを見ていた。

「ご馳走様でした！

もー、おなかいっぱいっ！！」

さっきまでの悲しい気持ちはもうどこかに吹っ飛んでしまった。

……おいしい食べ物食べて満足しちゃうなんて、

あたしってかなり単純なのかもしれない……。

食後、センサーの淹れてくれた紅茶を飲んでいると、センサーが少しまじめな顔になって言った。

「なあ、井上。

結局なんでここのマンションのエントランスに居たんだ？」

「あ、それは」

アタシは『カレシを待ってたんです』と言いそうになったけど、  
はっとして口をつぐんだ。

仮にもセンサーにカレシの部屋に行くって言うていいのかな???

「知り合いの人に勉強を教えてもらっ約束があったんです」

……ウソは言っていないと思う。

多分。

センサーはちょっと怪訝な顔をしたけど、

「ああ、参考書も持ってたようだしな」と言っって紅茶を飲んだ。

かみさまっつ

「そういえば、センサーってお金持ちだったんですね」

アタシはこの重たい雰囲気をナント力したくて、わざと話題を変えた。

……もう少し普通の話題でもよかったのに、アタシってばなんでこんな変な話題振っちゃったんだろ？

だってほら、センサーがちよっと困った顔をしてる……。

「ご、ごめんなさい！

アタシ、いつも思ったことを、すぐ口にしちゃって……  
チアキにも『もう少し考えてから話さない』って良く怒られてるんです！

だから、あの、その　今言ったこと、忘れてください」

アタシは顔を真っ赤にしながら、センサーに謝った。

ああ。

なんでアタシって、いつも考えなしなんだろ　。

「そんなに謝らなくていいよ。

だいたい、その素直さが井上のいいところでもあるしな」

センサーはアタシの方を見て、爽やかに言った。

「　親戚がこのマンションのオーナーでね。

住んでるついでに、マンション内の見回りなんかもするって約束で格安で借りてるんだよ。

親戚は家賃は要らないって言うてくれるんだけど、さすがに先生も社会人だしな。

って訳で、残念なことに金持ちじゃないんだなあ」

そう言うと、センサーはアタシの頭をぼんぽんと撫でる。

せ、センサーって優しすぎ……。

こんな優しいセンサーなら、きっと彼女さんとか、いるんだろうなあ。

ぼんやりとそう思ったときだった。

ピンポーン

急にチャイムの音が聞こえた。

も、もしかして、先生の彼女さんの来訪??

アタシはびっくりする。

彼女さんが来たとき、先生の部屋にアタシが居たら　　まずくない???!!

「せ、センセエ。

アタシがここに居たら、まずくないですか??」

アタシはときどきしながらセンサーに言ったけど、  
「べつに？　なんで？」と、当の本人は全く気にしてないみたい  
で、そのままインターホンに出る。

「はいはい？」

ああ。別に良いけど。

ロック解除するから、入って」

え、と。

アタシ、どうすればいいんでしょう？？

か、カミサマ。

どうか。

どうか誤解で修羅場にはなりませんように　。

アタシはとりあえず心の中で、カミサマに祈った。

王子様？

「翼あゝ 俺はもうがっかりだよ」

急に扉が開いたかと思うと、長身の人がセンサーに抱きつきながら言った。

「はあ？ 今に始まったことじゃないだろ？」

センサーは何事もないように受け答えしてるけど……。

えーと。

アタシの目の前で、

大の大人の男が二人。

ぎゅーってハグしてるわけで……。

べ、別に人の趣味をとやかく言うつもりはない……けど。

その、ちょっと、驚いたって言うか、なんていうか……。

アタシが目丸くしていると、センサーは

「うちの生徒がびっくりしてるじゃないか」とちょっと嫌そうな顔で言った。

「生徒？」

その人はセンサーを離すと、アタシをつま先から頭のとっぺんまで見える。



「か、かわい〜！  
なんだよ翼。

お前、こんなにかわいい彼女、いつの間につくったんだよ？

ああ。

だから昨日の合コンに來なかつたのか。

それにしても、生徒なんだろう？

いいのか？ 先生が生徒に手を出しても……？」

「彼女じゃないって！」

センサーはアタシをちらりと見ると、ちょっと顔を赤らめて否定する。

んつと。

つまり。

センサーとこの男の人は、恋人同士じゃない……ってこと？

そっか。

アタシの……早とちりなのか。

アタシはニヤニヤと笑う男の人を見る。

センサーよりちょっと背が高くて、すっとした顔立ちをしている。  
一言で言えば『美形』

さぞかしもてるんだろうなあ。

アタシがぼんやりそんなことを考えていると、その美形がアタシ

の前にすつと立った。

「お嬢さん。

翼の彼女じゃないんなら、俺と付き合いませんか？

俺は翼の幼馴染の 川原 かわはら 弓矢 ゆみや

お嬢さんのお名前は？」

優雅に挨拶をする彼 川原さんは、まるで王子様みたいなステキな笑顔だ。

フリーの女の子だったらこの笑顔だけでメロメロになってしまうに違いない。

けど。

アタシにはアツムって言う、すっごいカッコイイ（ちょっと意地悪だけど）カレシさんが居るのだ。

「あ、井上 咲です。

あの、その ごめんなさい」

アタシはぺこりとその場で頭を下げる。

「えー？

彼氏でも居るの？ 残念だなあ！」

河原さんはかなりオーバーアクションで残念を表現し、センサーはあきれた顔で彼を見ていた。

そしてアタシは帰路につく

河原さんはセンサーお手製の『オムライス』をがつついて食べている。

その食べっぷりはまさに豪快！の一言。

王子様ががつつと食べているさまは、なんと言っか　圧巻？だ。

あのあと河原さんは急にセンサーの方に振り向いたかと思うと、両肩をがしつと捕まえて「腹減った」と一言。

センサーはやれやれ、といった感じで「ちょっと待ってる」と台所からふわふわオムライスを持ってきた。

センサーったら、おかわり有るとは言ってたけど、すでにつくってあったとは！

脱帽でございます。

「ふう　食べた食べた」

河原さんは紅茶を一口で飲み込むと、満足そうにおなかをさする。

……嗚呼。

何もしなければ『王子様』なのに。

行動が、言動が、実に残念なわけで。

でも、それでもついつい目が離せないってのは、やっぱり美形オ  
ーラのせいなのかな？

その時、アタシのケータイが鳴った。

ピンクのケータイを開けると、Eメール1件と表示されてる。

嫌な予感がして見てみると、アツムからのメールで、

『ごめん

予想より時間が掛かりそうだ。

今日は無理だと思うので、帰ったほうがいい。  
夜、連絡する』

な、な、な――っ！！

なにそれ。なにそれ。なにそれ！！

せつかくどきどきして、オクシヨンまで来て、

変なオバサンに色々言われて、なぜかセンサーに助けられて、

……ご飯まで食べさせてもらっちゃたけど、

それもこれも全部アツムに会いたいからなのにいっ！！

アタシはがっかり、がつくり、ぐったりして、センサーの家のテ  
ーブルに突っ伏した。

「咲ちゃん？」

そんなアタシを河原さんが呼ぶ。

「あ、あはは……」

アタシは力なく笑うと、センサーと河原さんに挨拶をする。

「用事が　用事がドタキャンになっちゃったんで、アタシ、帰ります。」

あの、センサー。

さっきは助けてくださってありがとうございました……  
オムライス。すごくおいしかったです」

ぺこりと頭を下げたアタシにセンサーは「気をつけて帰れよ？」  
と気を使ってくれ、

河原さんは「もっと咲ちゃんと話したかったなあ」と残念そうに言うてくれた。

アタシは、仕方なく。

仕方なく、家に帰ることにした。

朝に見た見知らぬ風景は、あんなにもきらきらと輝いて見えていたのに、

帰りの景色は、何処となくくすんでいて、アタシは思わずため息をつく。

アツムの……はか……。

## 切ない時間

その日、アツムからの電話もメールもなかった。

アタシは何もやる気がおきなくて、

ベッドに腰を下ろしながら、ぼんやりとテレビを見ている。

見ているといっても、ただ画像が目映っているだけで、

番組の内容なんて、全然頭に入っていない。

この前アツムの家に行くって話が出てから、アタシはどこか浮かれてた。

アツムはアタシと違って、社会人なんだから仕事が大切ってのも、分かってるつもりだった。

でも 本心に『つもり』だったって、思い知らされた……。

『私と仕事、どっちが大事なの？』って言う女の人の話をよく聞いたりする。

今までのアタシだったら、そんなの仕事に決まってるじゃんって思ってた。

だって、何をするにもお金は必要だし。

仕事してなかったら、収入ないし。

将来にだって希望のきの字も見つからないって思ってたから。

でも、今はそういう女の人の気持ちがちょっと分かる。

『どっちが大事なの？』の言葉の裏には『私のこと、愛してる？』って言葉が隠れてるんだ。

面と向かって聞けないほど相手のことが好きなんて、かなり盲目の愛なのかも。

でも、男の人は言葉通りに捕らえちゃうから、言葉も気持ちもすれ違っちゃう……。

切ないな。

アタシは付き合ってもっと楽しいことだと思ってたけど、恋愛は切なくて、苦しくて、辛いこともあるんだって気が付いた。

ねえ、アツム。

アツムはアタシのこと、どれくらい好きなのかな？

鳴らないケータイに問いかけても、答えなんて見つかるはずもない。

アタシはそのままベッドに仰向けになって倒れこむ。

白い天井がぼんやりと滲んで、アタシは静かに涙を流した。



## 会いたいキモチ

アタシはケータイの着信音で目を覚ました。

あ、アタシいつの間にか寝ちゃってたんだ……。

体を起こしてケータイを見ると　アツムからの電話！

「あ、アツム　？」

ちよつと、ほんのちよつとだけ、声がかすれた。

『咲？　電話するって言ったのに、悪いな』

アツムの声が、アタシの体にしみこんで来る。

その声が、とても優しく、アタシは思わずどきりとした。

「うっん。お仕事だったんでしょ？」

忙しいのに電話してくれてありがとう。

声が聞けただけでも、嬉しいよ」

『　声がいつもと違うけど、寝てたのか？

本当はもう少し早く電話するつもりだったんだけど、  
以外に時間掛かってしまって。

日付も変わったから、メールにしようかとも思ったんだけど、  
俺も咲の声聞きたかったしな』

アツムはいつもよりぶっきらぼうに言ったけど、

それって照れ隠し……なんだよね？

「ねえ、アツム？

アタシのこと、好き？」

電話口のアツムはちよつと間を置いてから、

さっきよりもつとぶつきらぼくに「ああ」とだけ言ってくれた。

アタシは嬉しくて、恥ずかしくて、くすぐったくて。

ちよつと涙が出そうになった。

『明日は時間あるから、いつものところで待ち合わせな。

あと、ドリル。

忘れんなよ？

じゃあお休み。子供は早く寝なさい』

そう言うのアツムからの電話は切れた。

たった三分くらいの電話だったけど、

アタシはすごく嬉しくて、やっぱりアタシはアツムのことが大好きだ  
だって再確認した。

また考えなしに言っちゃったけど、今回はいいよね？

だって……アツムのキモチがちゃんと聞けたんだし。

アタシはケータイを胸にぎゅって抱いたまま布団に入った。

嬉しくて、ときどきして、なんだか眠れないけど、  
はやく明日になってアツムに会いたかったから。



## 昨日のハナシ

「おはようー」

後ろから声を掛けられて、振り向くとそこにはチアキがいた。

「おはよー」

アタシは下駄箱から上靴を取り出しながら言う。

チアキはアタシの顔を覗き込んで言った。

「ん？ なに？」

寝不足？ ちょっと目の下にくまが出来てるけど？」

「え？ ホント？」

アタシは目の下の所を指でこする。

「またカレシの電話でも待ってたの？」

「そうじゃないけど……」。

早く朝にならないかなーって思ってたなら、寝れなくて……」

「なるほどー」。

じゃあ、今日もデートなんだ」

「え？！ なんで分かるの？？」

アタシが驚いていると、チアキはアタシのおでこを指で押しながら「咲が夜更かしするのって、対外カレシがらみだし！」と言った。

た、確かに。

否定は……出来ないけど。

アタシは押されたおでこを手で押さえながら、チアキを睨んだ。

でも、チアキはそんなの気にする様子もなく、そのまま教室へと歩き始める。

「あ、そーだ」

急に振り向くと、チアキは一言

「寝ぼけてセンサーに抱きつかないように！」とアタシに注意する。

「！！！っ

そ、そんなことしないって！！」

アタシは昨日センサーに抱きついちゃったことを思い出して、今さらだけど恥ずかしさに顔を赤くした。

「ねえ、綾実は？」

アタシは教室を見渡しながらチアキに聞いた。

彼女は毎日朝練があつて、この時間ならとつくに教室に居るはず。なのに、今日はなぜかその姿が見えたらなかった。

「あれ？ そういえば居ないね。」

……かばんもないみたいだし。  
今日休みなのかな？」

チアキは少し首をかしげながら言う。

休み？

「綾実に言いたいことあつたのになあ」

ぼつりと独り言を言うと、チアキは目ざとく「なに何？」と身を乗り出して聞いてきた。

「え？」

あー、えーつと。

そんなにすごいことじゃないんだけど、一応言っておかないとなーって思つて、こじれたりすると、ちよつとめんどいし」

「こじれるってことは、先生がらみのこと？？」

こじれる前にとりあえず、このチアキちゃんに言いなさい！」

「そんな目を輝かせなくてもいいって。たいした話じゃないし。んーつと。」

昨日、アタシ、カレシの家に行くことになってね」

「はあ？！」

なにそれ！！

聞いてないし！！」

チアキはとたんにむすつとした顔になった。

「後で報告しようと思ってたんだってば。

大体最初に言っと、チアキってば事あることにニヤニヤしてそうだし」

「う……

確かにそれは否定できない、かも。

まあいいや。

で？

彼氏の家に行つてそれから？？」

「カレシのマンションのエントランスまで行つただけど、急に仕事が入つて会社に行っちゃつて。

で、仕方なくエントランスで待つてたの。

そしたら犬を抱いた変なおばさんに絡まれちゃつて。

困つてたらそこに佐藤センサーが偶然現れて」

「はあ？？」

「助けてもらつて、ついでにセンサーの家でお昼をご馳走になつてそうしているうちに、カレシからメールで『仕事が長引くから帰れ』つて言われて。

で、家に帰つたの」

昨日のことを簡単に掻い摘んで説明してみたけど、  
チアキは口をぽかんと開けたまま固まっていた。

「チアキ？ どうしたの？」

「……ど、どうしてそんなぐーせんが??!!  
しかもなんで先生の家でお昼をご馳走してもらってんのよ！」

そう言つとチアキは眉間にしわを寄せる。

「でも確かに。」

綾実にちゃんと言っておかないと、これは 間違いなくこじれる  
ね」

アタシたちは顔を見合わせて、深くため息をついた。



## うまくいかない日

センセーが出席簿を持って教室に入ってきたけど、綾実の姿はま  
だない。

「今日、倉沢は風邪で休みだ。  
みんなも体調管理には気をつけるように」

そうセンセーが言って、今日は綾実が学校に来ないのを知った。  
アタシはなんとなく申し訳なく思う。

何がつて訳じゃないけど、なんとなく抜け駆けみたいな。

……そんな感じになってしまってるから。

メールや電話をすればいいと思ったけど、あたしってばアツムの  
ことばかり考えていたせいで、  
すっかり綾実の連絡先を聞いてなかったことに今更気が付く。

アタシってなんでこう、抜けてるんだろ。

その日はなんだか何もする気になれなくて。  
その上、部活では失敗して、せっかくのお料理を黒焦げにしてし  
まった。

あんなに楽しみだったアツムとのデートも、なんとなく気が重く  
感じる。

アタシはアツムとの待ち合わせの店で、ゆっくりと紅茶を一口飲む。

なぜか今日は、紅茶の優しい味がなくて、代わりに口の中に熱い感覚だけが広がった。

## アタシとアツムとお仕事と

「咲？」

不意に名前を呼ばれて、アタシは顔を上げる。

そこにはアタシのカレシ　アツムの心配そうな顔があった。

「え？　あ、ごめん。」

なんかぼーっとしてた……」

アタシはそう言うと、カバンからドリルを出してアツムに渡す。

「アタシ、結構頑張ったんだよ？」

アツムはドリルをぺらぺらとめくって「よく頑張ったな」とアタシの頭を撫でた。

この瞬間が、アタシはかなり好きで  
アツムの笑顔も大好きで　。

アタシはこの時の為に勉強を頑張っていると言っても過言じゃないのだ。

撫でていた手がアタシのおでこに触れる。

「熱は　ないみたいだな？」

熱？

もし顔が赤いなら、それはアツムにときどきしてるからだよ？

そう言おうと思ったけど、さすがにそれはちょっと恥ずかしいな。そんなことを考えていると、アツムはちょっと心配そうな顔をしてくう言った。

「咲の顔色悪いから、今日はもう帰ろう」

「え?!」

アタシは思わず素っ頓狂な声を上げた。

「な、なんで？」

今あったばかりなのに?!」

反論してみたものの、アツムには敵わなかった。

次のデートの約束は取り付けたものの、アタシは半ば強引に家に帰るように言われた。

「心配だから家まで送るよ」

アツムはそう言ったけど、途中で仕事の電話が掛かってきて、会社に戻らなければいけなくなった。

「アタシ、別に具合悪くないから。大丈夫だから、お仕事行って来て？」

社会人はお仕事頑張らないと！　でしょ？」

アタシを家まで送り届けてから行っても間に合つとアツムは言つてたけど、

アタシは丁寧にお断りをした。

アタシのせいでアツムに迷惑掛けたくないし。

「家に着いたら、メールしろよ？」

それと、暖かくして早く寝るように！」

アツムはアタシの頭をぼんと撫でて「ありがとな」って呟いた。

小さくなっていくアツムの後姿を見送って、アタシは家に帰ることにした。

ホームに着くと、なんだか足が重い。

今日は特に運動したわけでもないのに、足がだるくて仕方がない。

アタシはホームにあるベンチに腰を下ろした。

## センサーと点滴

「井上？」

急に肩を掴まれて、名前を呼ばれた。

「大丈夫か？ 井上」

アタシは重たいまぶたを何とか開けて、その声の主を見る。

「せ、せんせ？」

そこには心配そうな顔をした佐藤センサーの顔があった。  
アタシはセンサーの顔をぼんやり眺める。

するとセンサーの手がふわりとアタシのおでこに触れた。  
ひんやりとした感覚がとても気持ちよくて、アタシは思わず目を  
瞑る。

「井上、立てるか？ いくぞ？」

センサーの声が、なんだかとても遠くから聞こえてくる。

その声に答えようとしたけど、体の奥からじわじわと睡魔が襲っ  
てきて

アタシは再びまどろみの中に溶けていった。

ふと気が付くと、そこは白い空間だった。

アタシの右手には管が付いていて、その先には点滴のパックが付いている。

「点滴……」

アタシは体を起こそうとしたけど、なんだかうまく力が入らない。  
ナニコレ？

どうということ？？

「気が付いたか？ 気分はどうだ？」

点滴にばかり気をとられていたから気が付かなかったけど、  
アタシの左側になぜか佐藤センサーが居た。

「え？

あれ？？」

アタシ       ？       」

アタシが戸惑っていると、センサーは説明してくれた。  
それによると、アタシはホームにあるベンチでぐったりとしていたらしい。

その時センサーがアタシを見つけて、病院まで運んでくれて  
で、今に至るんだそうだ。

「井上の家には連絡入れておいたから、とりあえず点滴が終わるまで寝てていいぞ。

あと一時間くらい掛かるらしいからな」

そう言つとセンサーはアタシのおでこを触つて「うん、だいぶよくなつたな」と言つて笑つた。

## カンチガイの夜

「咲、大丈夫？」

おかーさんの声がした。

うつすらと目を開けると、おかーさんの心配そうな顔。  
わざわざ来てくれたんだ……。

「大丈夫。……ちょっとだるかったただけだし。  
点滴したらかなり良くなったし」

「そう　？　あまり無理はしないでね」

おかーさんになんだか心配かけちゃったな　。

そう思っているとおかーさんはセンサーにお礼を言っている。

あ、そうだ。

アタシもお礼言わないとだった。

センサーに色々迷惑かけてたのに、御礼の言葉一つも言ってなかったアタシ。

具合悪かったとはいえ、それはないよね。

「あのっ。センサー。」

色々迷惑かけてしまって、ほんとすみませんでした」

アタシがそう言うと、センサーは「井上は俺の生徒なんだから、



そんなこと気にしなくて良いんだぞ？」と言ってくれた。  
爽やかな笑顔のオマケつきで。

アタシはなんだかときときしちゃって、思わず目を逸らした。

逸らした目線の先には　ちょうどおかーさんがいる……ってか、  
ち、違うからね？　おかーさん！

センサーが好きとか、そんなんじゃない。　。

アタシの顔がよっぽど言い訳じみていたのかなんなのか。

おかーさんはものすごく含みのある笑顔を見せると、センサーに  
分からないように口パクで

『大丈夫。秘密にするから』だって……。

な、何を秘密にするのよっ？！

ちよっと！　ほんとに違うんだってバ……！

点滴も終わって、家に帰るときわざわざセンサーはアタシのう  
ちまで送ってくれた。

アタシが途中で倒れたりしたらまずいだろうと付いてきてくれた  
訳なんだけど……

おかーさん……めっちゃ勘違いしちゃって、やたらとにやにやしち  
やってるし。

ほんと違うから。

アタシが好きなのはアツムなんだからっ！

なんかもっ、勘弁してください……！

## おかゆと妹

「咲姉、やっぱ風邪なの？ うつさないでよね」

家に入るなり妹の美季から言われた言葉がコレだ。

も〜！ほんと可愛くないんだからっ！

「ほらほら。お姉ちゃんは本当に具合悪いんだからそんなこと言わないの！」

「……はい」

美季はおかーさんに適当な返事をして、二階に上がっていく。

「全く。素直じゃないんだから……」。

先生から連絡があったとき、電話に出たのが美季だったんだけどね、すっごく心配してたのよ」

おかーさんはそういいながらアタシをとりあえずリビングのソファーに座らせてくれた。

美季が心配？？ ほんとかなあ？？ 昔の美季なら心配してくれ  
たろうけど。

今はなんていうか、生意気で自分勝手だし……。

「何か食べられそう？ おかゆとか…… ヨーグルトあたりなら大丈夫かしら？」

そう言うとおかーさんは「一口でも良いから食べてね」とおかゆとヨーグルトをテーブルに並べた。

一口。

頑張ってみよう。

おかゆをスプーンですくって、ぱくりと食べてみる。

「食べれそう……ありがとね、おかーさん」

塩味が丁度良くて、アタシはゆっくりながらもおかゆを完食した。

「おいしかったよ。ごちそうさま」

アタシはそう言つと、おかーさんが用意してくれたパジャマに着替える。

「おかゆ、美季がつくつたのよ」

「えっ！　おかーさんが作ってくれたんじゃないの？！」

おかーさんの言葉にびっくりして、アタシは先ほどまでおかゆが入っていた小さな土鍋を見た。

「お母さんは咲を迎えに行くことになったから時間なくてね、そしたら美季が『私が作ってあげる。咲姉おなか減ってるかもしれないし』だつて」

おかーさんはふふつと笑ってから「あの子、いつも意地張ってるけど、お姉ちゃんのこと大好きなのよ」と言った。

「そ、そうなの……かなあ??」

なんか良く分かんない。

反抗期ってやつなのかな??　だから素直じゃないの？

ぼんやりそんなことを考えてみたけど、やっぱり良く分からなかった。

アタシは処方された薬を飲んでベッドに入る。

横になるとさっきまではなんともなかったのに急に眠気が襲ってきて、

アタシはアツムにメールを出来ないまま眠ってしまった。

## 熱とスポーツドリンク

ぼんやりとアタシは目を開ける。  
カーテン越しに見える陽はすでに高く、不思議に思いつつ壁にかけてある時計を見る。

10時35分

アタシは驚いて飛び起きた　　気持ちは。

でも心とは裏腹に、アタシはベッドの中で小さく動いたただけだ。  
な、なんで??

驚いていると、丁度アタシの部屋のドアが開いた。

「咲。起きたのね。どう?調子は?」

おかーさんは手にしていたおぼんをアタシの机に置くと、スポーツドリンクの入ったグラスを差し出す。

……あ、そっか。

アタシ昨日ひどい風邪を引いたんだった。

寝起きでぼんやりする頭をむりやりフル回転させる。

「ん　あんまよくない。  
ちよっと、起こして……」

アタシはおかーさんに体を起こしてもらうと、スポーツドリンクを一口飲んだ。

風邪を引いたらとりあえずスポーツドリンクで水分補給するのがうちのシキタリ？　だ。

なんか、ただ水を飲むのよりいいらしいって事は知ってるけど、何がいいのかはちょっとわかんない。

意外と喉が渴いていたみたいで、アタシはそれを飲み干す。

なんとなくけど、少し体の調子がよくなった気がした。

「おかゆ。食べれるかしら？」

おかーさんはそう言いながらアタシにおかゆの入ったお茶碗を手渡す。

ふわりと湯気が揺れて、アタシのおでこに触れた。

「多分大丈夫。　いただきます」

アタシはそう言つとスプーンでおかゆをすくって食べる。

病気になると思わずおかーさんは「梅がゆ」を作ってくれる。

これはアタシも大好きで、熱があるときでもなんかさっぱりしていて食べやすいのだ。

「じゃあ、今日はゆっくり休むのよ？」

おかーさんはてきぱきと空のお茶碗と薬が入っていた袋を片付け

るとアタシの部屋を後にした。

アタシは布団に包まりながら、何気なくケータイを手に取る。

メールが……2件……

……あ……

しまった……

アタシ、アツムにメールするのすっかり忘れてた！

お、怒ってるかなあ??

アタシはちょっと泣きそうになりながらメールを開いた。

お姫様抱っこ???

「……………」

アタシはケータイのディスプレイを見つめる。

絶対、絶対アツムからのメールだと……………そう思ってたのに……………。

「二件ともチアキから……………か……………」

風邪大丈夫?っていうのが一件目。

で、二件目は　はいつ?!

なんだこれ?

アタシは目を擦ってから、もう一度チアキのメールを端から端まで丁寧に読む。

『咲が先生にお姫様抱っこされてたってうわさが流れてるんだけど? 　　どういうこと?　彼氏とデートじゃなかったの? 　　とにかくそれを見たって言う子が結構居てクラス中大騒ぎだよ?! 　　ほんとなの?????』

「どういうこと?」と聞かれたけど、アタシだってわかんないよ?!



えっと、どういことなの？？？

アタシの思考は停止寸前だ。

意味が……解ないんですけど。

アタシはチアキに電話をした。  
今の時間なら、なんとか休み時間のはずだ。

「もしもし？ 咲？」  
あんた、何やってんのよ！！」

聞こえてきたのはコール音ではなくチアキの怒鳴り声だった。

「チ、チアキ……」  
電話出るの早いね」  
「当たり前よ！ だっていつ咲から電話が掛かってきてもいいように、すたんばってたんだもん！」  
電話の向こうのチアキはちよつと得意そうな声を出している。

「で、どういことなの？ 咲」  
「それは……アタシが聞きたいくらいなんだけど」  
「はあ？」

チアキはため息をつく、「ちゃんと順を追って話さない！」  
とアタシに言った。

## 嘘みたいな偶然

「じゃあ、もう一度聞くけど、アツムさんと別れてから駅のベンチでぐったりしていたところ偶然先生に会って、病院まで連れて行ってもらった……ってことなのね？」

しかも気が付いたら病院だった、と……」

「う、うん」

電話の向こうでチアキのおっきなため息が響いた。

「全く！　なんでそうなるかなあ！

大体アツムさんは咲が具合悪いって分かってたんでしょ！！  
なのになんで彼女を放って置くかなあ！！」

「う、ごめん」

あまりの剣幕にアタシは思わず謝る。

「なんで咲が謝るのよ！　家まで送るくらいしてくれても良いもん  
でしょ！！」

「ん、でも、アタシが一人で大丈夫って言ったし。

……もともとその時点ではアタシ全然元気だったし……」

アタシはしどろもどろになってチアキに弁明する

そう。

アツムは『家まで送る』って言うてくれたのだ。

断ったのは アタシ。

だからチアキの怒りはアツムじゃなくてアタシに向いて当然なの  
だけど

大親友のチアキは「そうなの?！」といいつつもまだ納得して  
いないようだった。

「だから先生は病院に連れて行ってくれただけなの。  
もしチアキが何か聞かれたらそう言うておいてくれないかな?」

「まあ いいけどさ……。」

あ、チャイム鳴ったから切るね。

とりあえず、安静にしてるように!」

よほど慌てていたのか、チアキはアタシの返事を聞く前に電話を  
切ってしまった。

先生にケータイが見つかったら没収されちゃうもんね。

焦って授業の準備をするチアキが想像できて、アタシはくすりと  
笑った。

すると突然アタシのケータイがぶるぶると体を震わせる。

「!」

見るとそれは大好きな彼 アツムからのメールだった。

## メールとカレシ

『体調大丈夫ですか？』

簡素なメールだけど、アタシはおもわず顔が赤くなる。

大体いつもメールをくれるのは夜とかな訳で、こんな日中 仕事してる時間だと思う にメールくれることなんて今まで無かったから。

アタシのこと気にしてくれてるんだと思うだけで、アタシの心臓は飛び出しそうなくらいときどきと踊っている。

『昨日メールできなくてごめんなさい。』

あの後体調が悪くなって病院に行きました。  
風邪だそうです。

アツムに移ってないかとちょっと心配してます。  
お仕事、頑張ってください』

本当はもっともつと伝えたいことがあったんだけど、なんて返して良いのか分からなくなってるこんなメールを送った。

……。

アタシはもう一度メールを打つ。

そしてケータイのディスプレイを見つめた。

『早くアツムに会いたいです』

送信しても　いいかな？  
仕事中だと迷惑かな？

いいや！  
送信しちゃえ！！

アタシは目を瞑って送信ボタンをぎゅっと押した。

その直後アツムからのメールが来て、やっぱり簡素だったんだけど。

『俺も』

この一言にアタシは嬉しくて恥ずかしくて、おもわず布団を頭から被りケータイを抱きしめた。

## とある昼休みに

「咲ってかなりの天然？」

でもいいなあ。私も先生にお姫様抱っこされたかったよお」

綾実がぱくりとレタスチーズサンド食べながら言う。

「でも、覚えてないし。」

それにおかーさんに変に誤解されてたいへんだっただからさー」

そう言いながらぱくつと私が食べたのはミニハンバーグ。

某ネズミのキャラのかたちだ。

最近おかーさんは『キャラ弁』なるものにはまっているらしい。  
かわいいんだけど、食べ辛いのが欠点かな？

アレから二日後。アタシはすっかり元気になった。  
今は丁度お昼休みなのだ。

「つてか、私に感謝しなさいよ？」

みんなの誤解解くの大変だったんだからさあ」

チアキはから揚げを箸で刺しながらウインクをした。

「チアキ。あんた行儀悪いわね。」

それは刺し箸って言って……」

綾実は意外と礼儀作法に厳しい。

アタシは綾実とチアキの掛け合いに思わず微笑む。  
最近は三人でお弁当を食べるのが日課になっている。

「あ、そうだ」

チアキはそう言うとかバンから一枚の紙を取り出し、アタシの目の前に出した。

「？ なに？」

「文化祭のアンケート。  
今日締め切りだからよろしく」

「文化祭……来月なんだ」

全然忘れてたよ。しかもチアキが文化祭実行委員だったのね。  
プリントの右上にチアキの名前が代表として載っている。

「ちなみに部活は『喫茶店』の予定だから」

「へえ、喫茶店……」

じゃあやっぱクラスの出し物はこれかな？」

アタシはシャープペンを取ると『おばけやしき』と書いてチアキに渡す。

「なんつか、オーソドックス？  
私は展示会って書いたよ。」

「一番楽でしょ。ああいうのって」

チアキはそう言うと、アンケートをたたんでカバンの中にしまっ

た。



## 天然とパフェとカラオケ

アツムとの勉強のお陰で、今回のテストウィークはかなりいい感じだった。

いつもは赤点なんじゃないかとひやひやしてるんだけど、今回はかなり自信がアル。

「ねえチアキー。帰りにどっか寄ってかない？」

アタシが声をかけるとチアキはなんかこう　含みのある笑いをした。

「へえ〜。なんか余裕だねえ。

いつもならさ、テスト終わった当日って『もう駄目ー。家帰って寝るからー』って言ってるのに。

やっぱあれ？

アツムさん効果??　恋する乙女ってやっぱ違うわねえー」

うつつ。

間違っではないけどさー。

なんかこう、言葉ではっきり言われちゃうと恥ずかしいって！

「ってか、その。

いつも勉強見ってもらってるからだよ」

「そうねー。

咲は『やれば出来る子』なんだからねー」

……反論すればするほど、なぜかどつぼにはまっていくような気がする……。

「綾実〜！ チアキがいじめるよぉ〜」

アタシは丁度近くを歩いていた綾実に抱きついて助けを求めた。

「ちよっ！ 急にはびっくりするって！

それにチアキもチアキだよ？

天然でぼんやりな咲をからかつちゃだめでしょうが」

……天然でぼんやり？

助けてもらったのは嬉しいけど、ちよっといただけない台詞じゃない？？

ちよっと言葉が引つかかっているけど、まあいいや。

「綾実も一緒に行こうよ。ね？ パフェとカラオケに！」と綾実を抱きしめたまま言った。

綾実はちよっと恥ずかしそうな顔をして「ほんと咲って天然だよね」と呟いた。

## カラオケとイケメン王子

駅の近くにあるカラオケ屋さん。

そこはアタシの希望通りの店なのだ。

その店はカラオケ屋さんと喫茶店のオーナーが一緒みたいで、カラオケをしながら喫茶店の看板メニューでもある『パフェ』が頼めちゃうのです！

単なるカラオケ屋さんのパフェとはホントに全然違うからアタシはカラオケに行くならこのお店って決めている。

「私カラオケって久々かも」

綾実はカラオケの部屋をぐるりと見渡して言う。

「綾実は部活の鬼だしね」

チアキは曲の選択をしながら相槌を打つ。

アタシはというとおいしそうに並んだパフェの写真をしながら、どの子にしようかななんて考えていた。

三時間ほど歌いまくって、アタシたちはカラオケ屋さんを後にした。

「あー歌いまくって喉痛い」

「チアキ歌うまかったねえ。びっくり！」

「綾実も上手だったよ。今度チアキと二人でバンド組んでよ。そしたらアタシ見に行っちゃうから」

「楽器出来ないのにバンド??」

それ変だってー！」

そんなくだらないことを話していたら、綾実が急に立ち止まって言った。

「ねえ、あそこにいる人。

ちよつとかつこよくない??」

「え?

どこ??」

アタシたちが分からずにきよろきよろしていると、綾実は「ほら、あそこの背の高い人だよ」とじれったそうに言った。

ああ、あのスーツの人。

やっと分かったんだけど、なんか見たことあるような気がする…。

その人はアタシに気が付いたみたいで、爽やかにこっちに向かって歩いてきた。

って　こんなところで会うなんて思ってたんですけど?!

スーツなんか着ちゃってるところを見ると、以外にフツのリーマ  
ンだったのかな??

「咲ちゃん久しぶり!　テスト今日までだったんだよね?　お疲れ  
様」

ちよつと軽そうに挨拶してくれた王子様。  
アタシのこと覚えてくれてたんですね。

「か、川原さん。お久しぶりです」

こんなところで会うとは思わなかったなので、アタシはびっくりした。

## スーツの王子様

「名前覚えてくれてたんだ！　うれしいなあ」

にこにこと笑う川原さん。

少女漫画なんかだと、きつとピンクの背景に真っ赤なバラなんか  
が飛んでるんだろうな、とすっかり思ってしまったくらいの王子様ぶ  
りはスーツを着ていても相変わらずだ。

「川原さんこそ。」

あ、この二人はアタシの友達のチアキと綾実です」

王子様オーラにやられている二人を紹介すると、川原さんはにこ  
りと笑って「よろしく！」と挨拶をした。

きらきらの笑顔にチアキと綾実は顔を真っ赤にしてぎこちない笑  
顔を見せた。

すっかりすると頭から湯気が出そうな感じに思わずアタシは噴出  
しそうになるのをこらえる。

「今日は仕事なんですか？」

「ん？　そうだよ。」

社長が茶菓子買って来いって言うから。

今その帰りなんだー」

そう言うと彼は手に持っている紙袋をちらりと見る。  
紙袋には洋菓子店の名前がかわいく印刷されていた。

「あ、その店有名なんですよね？」

この前テレビの特集で見ましたよ！

チーズタルトがすごく人気で、すぐ売り切れちゃうとか」

「そうらしいねえ。」

あ、じゃあコレあげるよ」

川原さんはそう言うときあたし達に可愛らしくラッピングされたチーズタルトを手渡した。

「え？ いいんですか？！」

「いいのいいの。」

その他色々買ってあるから。

じゃあ俺そろそろ戻らないといけないから。

またねー」

川原さんはそう言うとき爽やかに去って行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5103p/>

---

おばかなアタシと年上カレシ 2

2011年9月18日13時22分発行